

公開特許公報

卷之三

丁巳歲元月乞乞子

し。伸びの問題と、伸びの緩和を
組合せよりなりの制限を用いることと
一方圧縮するものである。

ルミナ以外の物質に反応することが明らかれた。たゞ彼らの結果は過剰、活性化した組合体に招待してアーベルミナの導いたシリカゲルを粗体とし、これの粗体としては通常粗膜の粗体と使用される。この粗体としては用ひられてゐるもののが通用できるが、これらして用ひられてゐるもののが通用できるが、これらはアーベルミナに招待させた粗膜が所性のうちのうち、アーベルミナに招待させた粗膜が所性が見出した。

るであらうことを肯定し、実験的・臨床的観察を行つた。

(a) 酸化活性区分として、酸化活性の如く細孔性と呼ぶことと酸化活性の關係について実験を行つた。

その結果、第1回に示されるところより最初形態の酸化において、酸化活性 100%以上の古めの細孔性が 0.15 cm²/gより小さくなると反応活性が急激に低下することが判明した。

以上の知見を総合して、本実験者は、80%を含む排水ガス中の 80%除去率として、アンモニアを零点元割とする選択的脱硫脱元法を採用し、

(b) 酸化活性区分として、酸化活性は酸化剤（過酸化水素）を用いてとること。

(c) シリカの溶解度が 0.04%以上であるシリカとアルミニナを活性とすること。

(d) 酸化形態の相違として酸化活性 100%以上の古めの細孔性が 0.15 cm²/g以上の細孔性を有すること。

本場所で使用するシリカ・アルミニナ系粗体は、合成シリカ・アルミニナ系粗体の過度の粗粒で逆つて過酸化することができる。すなわち、シリカゲルとアルミニナゲルをあらかじめ作つておき、この両ゲルを混合させると反応、両成分のアルミニナゲルを過酸化させると反応せらる。反応後シリカゲルは粗粒で液を加えて溶解して反応せらる。一方 NH₄OH でシリカゲル上に沈殿させると反応せらる。

また、さきに述べた活性を測定せるもので最も簡単な方法でもいい。

この粗体に硫酸鉄または硫酸銅を投げ入れると反応は、通常より一段と速く行われる。すなわち、粗体が水と硫酸鉄または硫酸銅では反応せず、粗粒で液を加えて溶解したのち反応する。あるいは粗粒状に削製酸化銀の水粗粒を含めてそれを投げ入れると反応が速用される。

このようにして粗粒させた試験端を底盤にて押さえする方法が採用された。

この方法は、また底盤の最も反応を速めるために酸化活性 100%の粗粒であるとの経験を通じて考案された。

第 1 章 機械式中止装置による機器に対する過載性

もつね近畿の地圖が佐奈の地圖に比べて近く、
近畿地圖をうたわひ操作部屋が広く反応面が
比較に対する操作が大きいので操作の適度的
と新鮮にする必要が全く実現操作が可能である。
可行射出性があるため放送はプロセスに対し
て本実用的プロセスを操作するには放送するこ
とを可能にする割合までの精度を有している。

る条件下で、上記の初期の状態をそれぞれ用いた。

これらの処理をほどこした結果を未処理の分析
と比較検討した。

数 2 組体および触角の特性
組体は以上のシカ・アルミナが組合として構成され、これが組合せられたときに組合せられた。

卷之三

81.9% [15]	9.0	20.1	51.1	71.6	86.1
比収直角 (度/%)	107 (188)	208 (380)	344 (680)	500 (1,080)	836 (1,899)
全曲直角 (度/%)	0.55 (0.92)	0.70 (0.87)	0.50 (0.69)	0.50 (0.69)	0.71 (0.87)
直角以上 (度/%)	0.26 (0.31)	0.14 (0.20)	0.18 (0.23)	0.31 (0.35)	0.51 (0.44)

外因 20回戻、全長 600mm のステンレス鋼尺

卷之三

実験例 3) 試験した E_{16} 合成率 88.12% のシーカー・アルミニウムを粗体とする保険板粗粒と向じ粗粒に実験例 1) と併せ合成圧により試験を施行せしめ試験結果を用いて実験的試験を行つた。
この結果鋼板の射出初期は粗粒で 9.0 μ である。また、比較のために粗体としてかき混ぜる 0.44 g/cm^3 、吹出量 $2.30 \text{ g}^{\frac{1}{2}}/\text{g}$ 、充孔径 0.80

アラゴン石(1.0 g×3～6粒)を用いて実験の結果

おなじく居住低下的傾向がみられるのが珍らしくシリカ・アルミナ組成の場合は約30000時間経過

図 1 図

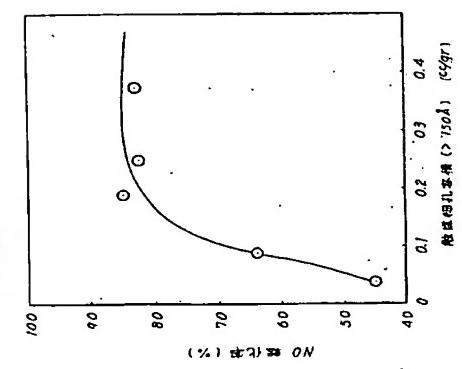


図 1 図は、反応活性に及ぼす触媒濃度の影響を示すグラフ、
図 2 図は、シリカ・アルミナ触体中のシリカ含有量と初期活性および吸収活性の活性の関係を示すグラフ、
図 3 図は、反応速度試験にかけた触体の活性変化を示すグラフである。

出典人 日本煙用油株式会社
代表人 岩本 実一

6. 防止装置の目録
（1）男爵室
出田 高 1 滴
田安 任 狂 1 滴
山越 朝本 1 滴
6. 前記以外の男爵室
横浜市港北区新吉町 1-2-0-0
山 田 茂 1 滴
東京都大田区角間町 1-18-7
鈴 木 1 滴
横浜市港南区船下町 6-4
山 田 成 1 滴
東京都墨田区押切町 1-33-21
鈴 木 1 滴
横浜市港北区新吉町 1-0-2-2
山 田 茂 1 滴
東京都大田区南千束 9-7-1-6
鈴 木 1 滴
東京都墨田区大岡 1-6-3-1-6
大 月 兼 1 滴

東京都墨田区下白銀 1-1-3
森 田 金 太 周

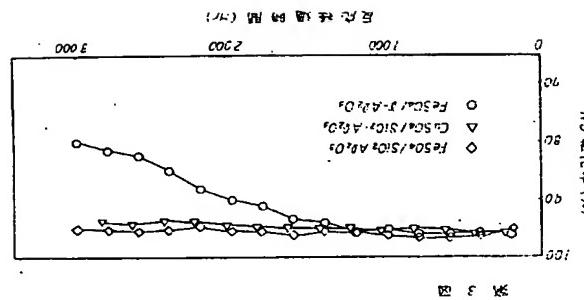


図 3 図

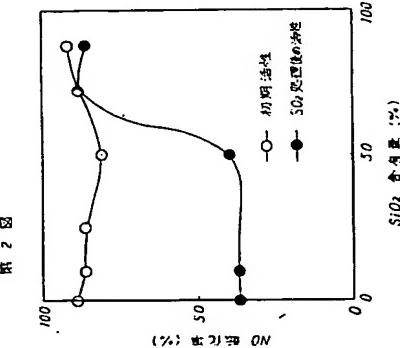


図 2 図